

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会

「青少年の自立・自律を支援する」

～多様な自立・社会参画を可能にし、互いに支え合う社会をめざして～

平成28年3月

神奈川県青少年問題協議会

目 次

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要	1
第1章 審議テーマ	
1 審議テーマの設定について	3
2 協議の経過と本報告書の構成	3
第2章 青少年の自立・自律を取り巻く現状	
1 若者の社会・職業への移行について	4
2 子ども・若者の地域活動について	8
3 高度情報社会への対応について	14
第3章 青少年の自立・参加・共生 ～青少年の自立・自律支援を考える上でのポイント～	
1 若者の社会・職業への移行について	18
2 子ども・若者の地域活動について	19
3 高度情報社会への対応について	20
第4章 青少年の自立・自律をどう支えるか	
1 成長と自立を支える一体的な取組み	23
2 自立・参加・共生を実現する子ども・若者の居場所づくり	24
3 困難を有する子ども・若者とその家族の支援	25
4 高度情報社会で自律できる環境づくり	26
参考編 子ども・若者の意識や実態について	
1 Webアンケート結果の概要	28
2 グループインタビュー結果の概要	37
資料編	
平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会 審議経過	40
平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会委員	41

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要

「青少年の自立・自律を支援する」～多様な自立・社会参画を可能にし、互いに支え合う社会をめざして～

1 審議テーマの設定

青少年を取り巻く状況を、青少年行政の3つの領域（自立支援、健全育成、環境整備）から総合的に把握し、その中で、青少年が生きる力を身につけ、社会の中で自立・自律していく道筋を捉え直し、今後の神奈川の青少年の育成と自立への支援のあり方について調査審議を行う。

- 【重点テーマ】(1) 自立支援：若者の社会・職業への移行について
(2) 健全育成：子ども・若者の地域活動について
(3) 環境整備：高度情報社会への対応について

2 青少年の自立・自律を取り巻く現状

(1) 若者の社会・職業への移行について

- 【現状】・若い世代ほど完全失業率は高く、長期失業者の割合も増加傾向にある。
・大学卒業者のうち、5人に1人は就職も進学もしていない。
・35歳未満の男性の4人に1人、女性の2人に1人が非正規雇用であり、若い世代の非正規雇用の割合は増加傾向にある。
- 【背景】・若者が仕事に就けない状況は世界的な問題、且つ若者雇用は不況になると失われやすい。
・労働市場に新しく入る若者は、非正規雇用に就くことが多くなっている。
- 【考察】・正規雇用と非正規雇用の間には、賃金や能力開発の機会、社会保障への包摂度合いについて格差がある。
・就職氷河期を経験した若者や、不登校や離職などで社会から離脱してしまった若者が、経験がない、乏しいという理由で採用されにくく、無業状態で滞留しがちである。

(2) 子ども・若者の地域活動について

- 【現状】・子どもの遊びの空間量や、遊びの種類・人数が急速に減少しており、室内・少人数での遊びに移行している。
・小学校在学者数の推移と比較して、子ども会会員数は著しく減少している。
- 【背景】・子どもを外で遊ばせることへの風当たりが強い。
・過剰に管理責任を追及しがちな日本の社会が、子どもの「遊び」の縮小を助長している。
- 【考察】・親、友人や仲間との関係の中で、他者からケアされた存在承認の経験がなくなり、他者に関心を持ち、他者と関係をつくろうという意欲が切り崩されていく状況が静かに起こっている。
・危険を察知できない、身体感覚が欠如している、失敗やトラブルに弱く極度に恐れる、世の中に答えが複数あるという実感が無いなどの子どもたちの状況は、経験の貧困が原因と考えられる。

(3) 高度情報社会への対応について

- 【現状】・高校生の約8割、中学生の約半数、小学生の1割強がスマートフォンを持っている。
・中学生、高校生の携帯電話・スマートフォンを通じたネットの長時間利用割合は増加傾向。
・大学生へのアンケート結果から「ネットはなくてはならない存在か」との質問に「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合は、本人にとっては94.7%、子どもたちにとっては66.1%であった。
・同アンケート結果より「SNSがなくてはならない存在か」との質問には「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合は、本人にとっては82.2%、子どもたちにとっては66.1%であった。
- 【考察】・サイバー空間で流通する情報は部分的なため、他者とのつながり方も部分的となりがちである。
・サイバー空間は現実の世界より相互監視が強く、SNSで全員がつながりあう息苦しさがある。

3 青少年の自立・参加・共生

～青少年の自立・自律支援を
考える上でのポイント～

(1) 若者の社会・職業への移行について

- 多様な自立を認め、支える
- 働く・学ぶ・生きるを支える

(2) 子ども・若者の地域活動について

- 信頼をはぐくむ
- 参画を支援する

(3) 高度情報社会への対応について

- 縁をつなぐ
- 想像力をはぐくみ、体験的な学びを支援する

4 青少年の自立・自律をどう支えるか ～ 目指す方向 ～

⇒ かながわ青少年育成・支援指針の改定に反映

(1) 成長と自立を支える一体的な

取組み

- ⇒ 自立をはぐくむ社会参画・共生
- ⇒ 子どもの発想から生まれる「遊び」を保障する
- ⇒ キャリア・デザインを支援する

(2) 自立・参加・共生を実現する

子ども・若者の居場所づくり

- ⇒ 顔が見える小さな場、社会とつながる場をつくる
- ⇒ 寄り添える場をつくる
- ⇒ 民間が活動しやすい環境を整え、連携をコーディネートする

(3) 困難を有する子ども・若者と

その家族の支援

- ⇒ 様々な人が参加できる居場所をつくる
- ⇒ 自立が難しい若者へ包摂的な支援を展開する
- ⇒ 困難を有する子ども・若者を様々な主体が連携し支える

(4) 高度情報社会で自律できる

環境づくり

- ⇒ 顔が見える場でのコミュニケーション・人間関係を前提にする
- ⇒ 子どもと若者が自らリテラシーを高める
- ⇒ メディア技術等を活用した新しい体験学習から学ぶ
- ⇒ 大人がメディアとの付き合い方を考える

第1章 審議テーマ

1 審議テーマの設定について

(1) 今期審議テーマ「青少年の自立・自律を支援する」

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会は、青少年を取り巻く状況を、青少年行政の3つの領域（自立支援、健全育成、環境整備）から総合的に把握し、その中で、青少年が生きる力を身につけ、社会の中で自立・自律していく道筋を捉え直し、今後の神奈川の青少年の育成と自立への支援のあり方について調査審議を行うこととした。

(2) 重点的に取り扱うテーマ

調査審議にあたっては、次の事項を重点テーマとした。

- 自立支援：「若者の社会・職業への移行について」
- 健全育成：「子ども・若者の地域活動について」
- 環境整備：「高度情報社会への対応について」

2 協議の経過と本報告書の構成

- 本協議会企画調整部会では、平成26年度に、全部会委員が、各自の専門的見地や取組み実績を踏まえた意見発表を行った。その発表内容及び意見交換の概要を「議論の整理」という形でまとめた。
- また、平成27年7～8月に、子ども・若者支援に関するボランティア活動等に携わっている大学生を対象としたwebアンケート及びグループインタビューを行い、「議論の整理」としてまとめられた事項に対する若者の意識や実態を把握し、協議内容の検証を行った。詳細は「参考編 子ども・若者の意識や実態について」（本報告書P28～）を参照。
- これらの経過を踏まえて、本報告書は、次の構成となっている。

第1章 審議テーマ

…今期の審議テーマの説明

第2章 青少年の自立・自律を取り巻く現状

…現代の青少年の自立・自律に関する現状の整理

第3章 青少年の自立・参加・共生 ～青少年の自立・自律支援を考える上でのポイント～

…青少年の自立・自律支援を考える上での基本的な視点

第4章 青少年の自立・自律をどう支えるか

…今後の青少年の自立・自律支援の取組みの方向性

- なお、本協議会での協議内容は、平成27年度中に改定予定の「かながわ青少年育成・支援指針」の検討に反映する。

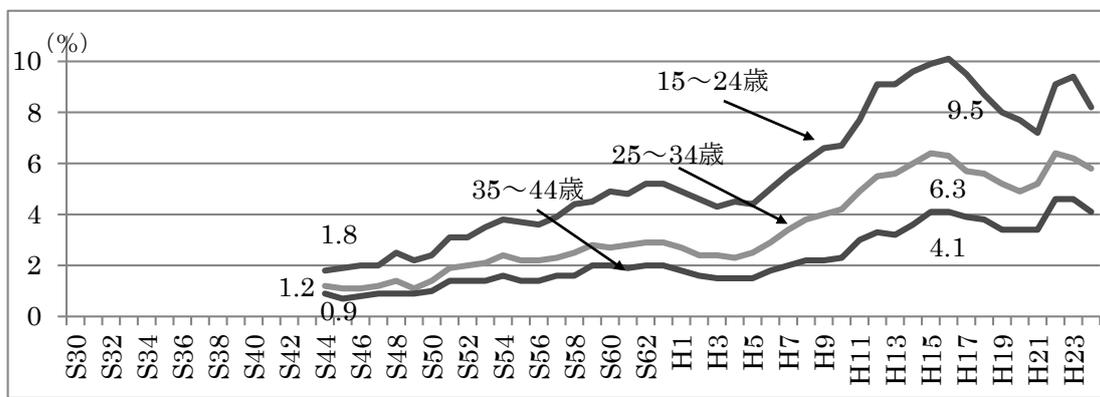
第2章 青少年の自立・自律を取り巻く現状

1 若者の社会・職業への移行について

<現状>

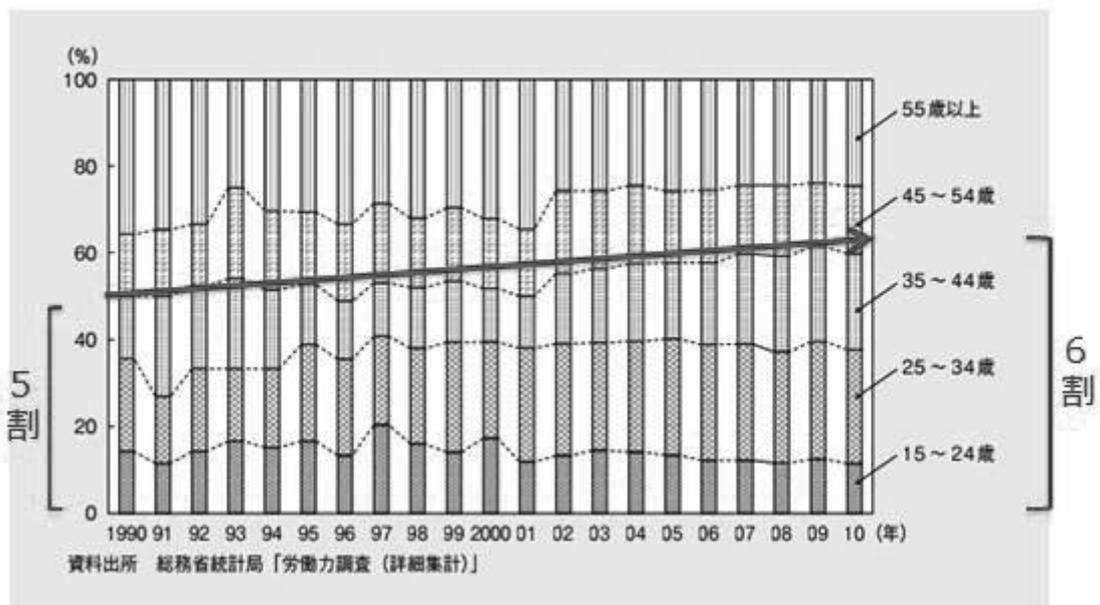
- 若い世代ほど完全失業率は高く、長期失業者の割合も増加傾向にある。
- 大学卒業者のうち、5人に1人は就職も進学もしていない。
- 35歳未満の男性の4人に1人、女性の2人に1人が非正規雇用であり、若い世代の非正規雇用者の割合は増加傾向にある。

図1：年齢階級別完全失業率



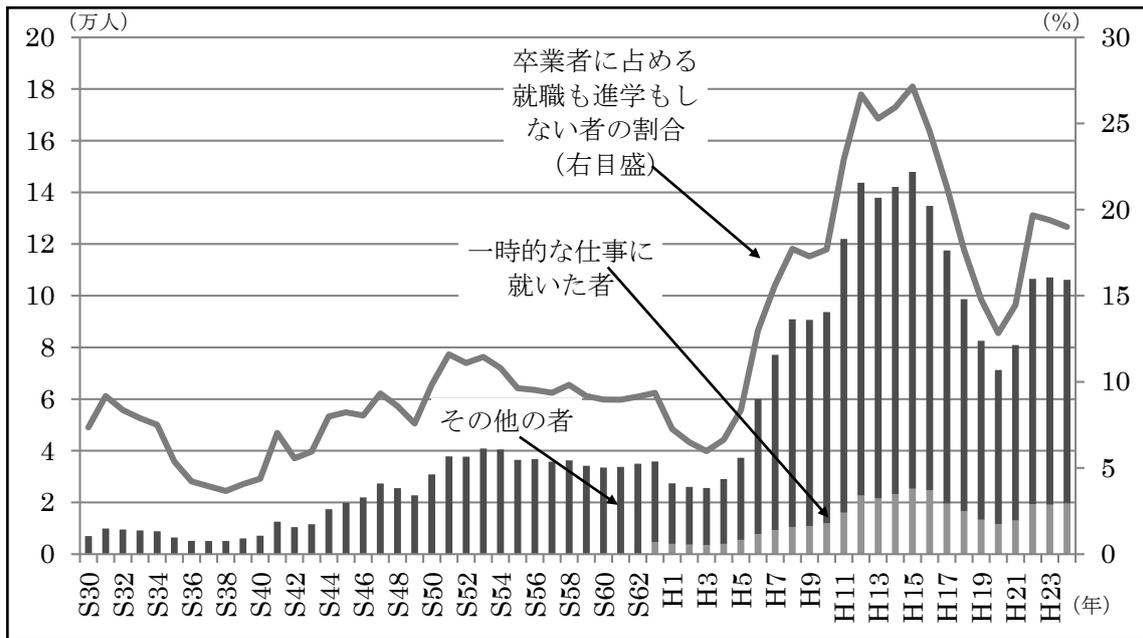
総務省統計局「労働力調査(基本集計)」

図2：長期失業者の年齢構成



平成24年被保護者調査(厚生労働省) ※グラフは平成23年度版労働経済白書(厚生労働省)

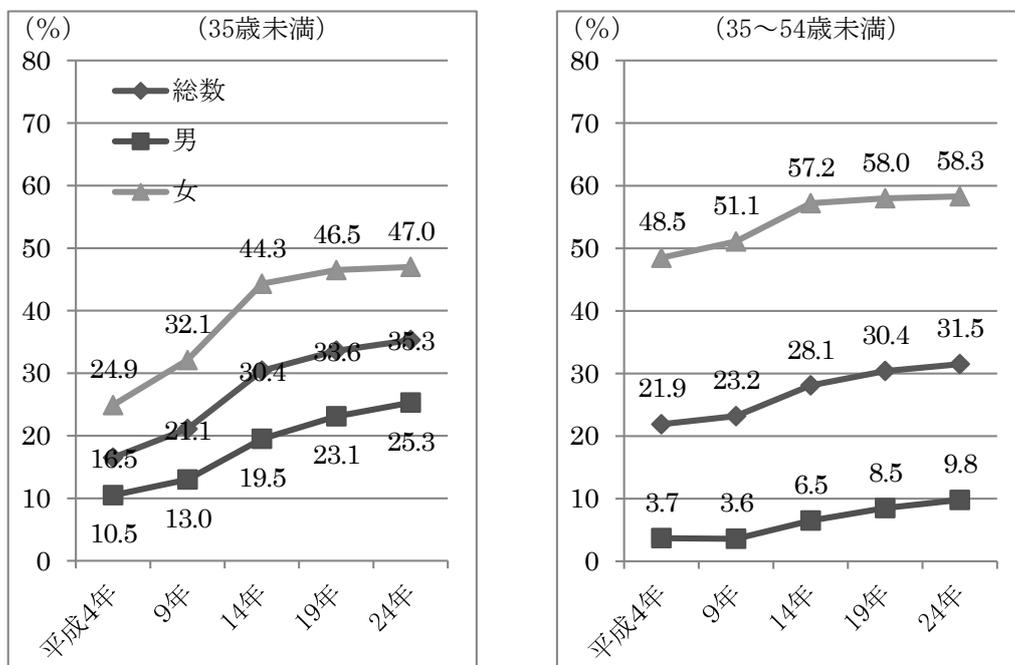
図3：大学卒業者のうち就職も進学もしない者の数及び割合の推移



文部科学省「学校基本調査」

- (注) 1. 学校基本調査において、卒業者の状況は、「進学者(就職し、かつ進学した者を含む。）」、「就職者」、「臨床研修医(予定者を含む)」、「専修学校・外国の学校等入学者」、「一時的な仕事についた者」、「左記以外の者」、「死亡・不詳」となっており、上記グラフの「就職も進学もしない者」はこれらのうち「一時的な仕事に就いた者」及び「左記以外の者」(グラフにおいては「その他」)をいう。
2. 一時的な仕事に就いた者は1988年、専修学校等入学者は2004年からで、それ以前はその他に含まれる。

図4：男女、年齢階級別非正規の職員・従業員の割合の推移 —平成4年～24年



総務省「平成24年就業構造基本調査」(注)平成4年及び9年の結果は千人単位で算出したもの。

<背景>

- 若年失業率は、成人失業率全体の水準と比べて3倍程度高く、ニートの増加が課題になるなど、若者が仕事に就けない状況は世界的な問題となっている。
- 若者雇用は不況になると失われやすい。
- 経済変動の頻度も振幅も大きくなる中で、正規雇用、有期雇用、短期の雇用を組み合わせるということが多くの国で起こり、労働市場に新しく入る若者は、非正規雇用で就くことが多くなっている。
- 日本では、「新卒一括採用」と「企業内訓練」により、若者の学校から職業への円滑な移行が支えられてきた。
- しかし、新卒一括採用は卒業時の景気に左右されやすい、また卒業時に限定されるため、中途退学者は移行システムに乗れないなどの課題や、企業内訓練は正社員に集中し、非正規雇用では限定的であるなどの課題も指摘されている。

- 若年失業率（15～24歳）は、途上国まで含めた世界全体で見ると、成人失業率全体の水準と比べて3倍程度高く、雇用も教育も訓練も受けていない若者（NEET）の増加が課題となるなど、若者が仕事に就けない状況は世界的な問題となっている。
- 若者雇用は不況になると失われやすい上、産業が求めるのは経験や資格・技術のある人材であり、若者はなかなか入れないなど、先進諸国に共通する若年失業の構造の課題がある。
- グローバル化の下、経済変動の頻度も振幅も大きくなる中で、企業がある程度安定的な経営をしていくために、正規雇用だけではなく、有期雇用、短期の雇用を組み合わせるということが多くの国で起こっており、労働市場に新しく入る若者は、このような形態の雇用で就くことが多くなった。
- 日本における若者の自立モデルの特徴は、企業や官公庁による「新卒一括採用」と「企業内訓練」に支えられた学校から職業への円滑な移行である。学校卒業と同時にフルタイムの無期雇用者として採用されるこの仕組みが、若年失業率やニート率を世界の中では相対的に低いものに抑えてきたといえる。
- 「新卒一括採用」は職務を限定しない大括りの職種区分での採用で、学校在学中に内定を得て、卒業と同時に安定した仕事に就職できる仕組みである。そのような仕事は「企業内訓練」がしっかりと行われる場合が多く、日本型雇用の重要な要素となってきた。
- こうした「新卒一括採用」「企業内訓練」を軸とした日本型の移行システムには、下記の課題が指摘されている。
 - ・ 卒業時の景気に左右されやすい。
 - ・ 卒業時に限定されるため、中途退学者は移行システムに乗れない。
 - ・ 学校における職業教育や企業外での能力開発の機会が縮小している。
 - ・ 教育訓練は正社員に集中し、非正規雇用の場合は限定的なものにとどまる。
 - ・ 大括りの職業区分での採用により、学校での教育と職業とが結び付きにくく、スキルを通じたキャリア教育がなされにくい。

- 組織的支援が強いのは高校までで、高等教育では、本人が大人であるということ
を前提に、個人が就職活動を行うスタイルであり、高等教育卒業者に対する組織的
就職支援は弱い。
- 非正規雇用が拡大する中で、これまでの若者の自立プロセスは揺らぎ、日本型移行
システムの枠から外れる（学校卒業時の未就職、中途退学、早期離職）若者が増えて
おり、この仕組みの持つ課題の方が大きくなってきている。

<考察>

- 正規雇用と非正規雇用の間には、国による程度の差はあれ、賃金や能力開発の機会、
さらに社会保障への包摂度合いについても格差があることが指摘されている。
- 中途退学や、未就職のまま学校を離れた若者、就職したものの早期離職した若者が、
安定的な仕事に就けず、アルバイトを転々としたり、無業状態にとどまる傾向が強ま
っている。
- 何がしたいのか本人がわからないケース、失敗を極度に恐れるケース、親が子どもか
ら自立できていないケースなども見られる。

- 正規雇用と非正規雇用の間には、国による程度の差はあれ、賃金や能力開発の機
会、さらに社会保障への包摂度合いについても格差があることが指摘されている。
- 中途退学や、未就職のまま学校を離れた若者、就職したものの早期離職した若者
が、安定的な仕事に就けず、アルバイトを転々としたり、無業状態にとどまる傾向
が強まっている。
- 何がしたいのか本人がわからないケース、失敗を極度に恐れるケース、親が子ど
もから自立できていないケースなども見られる。
- 長時間労働や過剰なノルマなど、厳しい労働環境は早期離職につながるばかりで
なく、メンタルヘルス上の問題も引き起こすことが指摘されている。
- 先進国において、若い世代では物質的な豊かさより精神的な豊かさを求める傾向
が強まっていると言われている。大手企業等にあえて就職せず、社会的起業など金
銭的収入より社会を良くすることに価値を置く働き方を選ぶ若者が注目を集めてい
るが、こうした若者の選択は一過性のものではなく、今後増えていくと考えられる。
- 生活や職業に対する価値意識の世代間での差が広がる中で、若者の中には、競争
的環境への不適合や、自らの意向とは異なる方向付けへの拒絶感が増しているよう
に思われる。

<参考：大学生のグループインタビュー から>

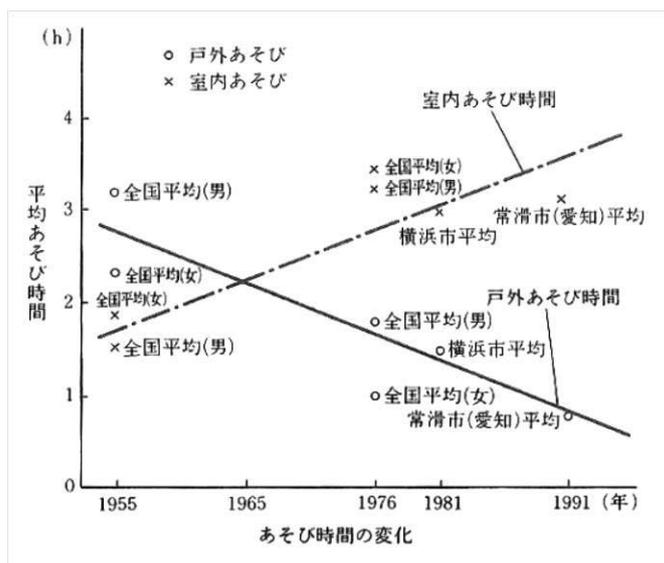
- グループインタビューの中で、この年齢でこのようなライフステージを迎えると
いったスタンダードがないことによって、自由に主体的に行動できる人もいれば、
どうしたらいいかわからなくなってしまう人もいるという意見も出ている。

2 子ども・若者の地域活動について

<現状>

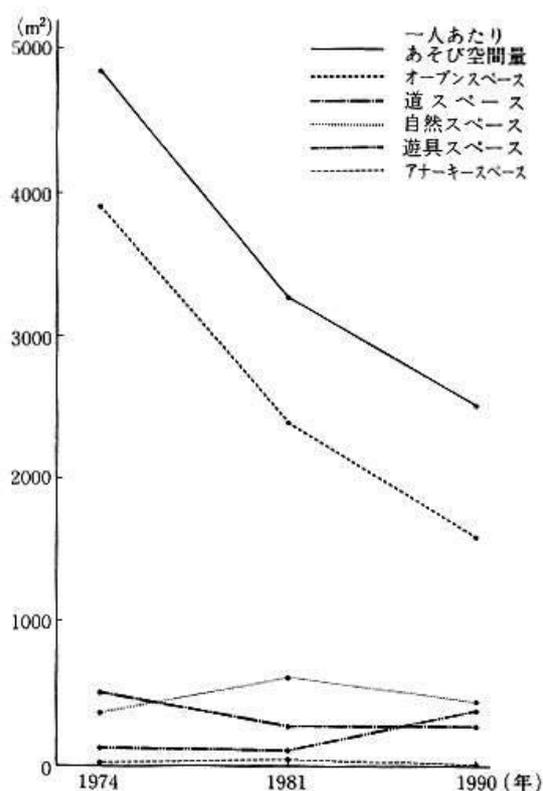
- 子どもの遊びの空間量や、遊びの種類・人数が急速に減少しており、室内での遊び、少人数の遊びに移行している。
- 小学校在学者数の推移と比較して、子ども会会員数は著しく減少している。

図5：あそび時間の変化



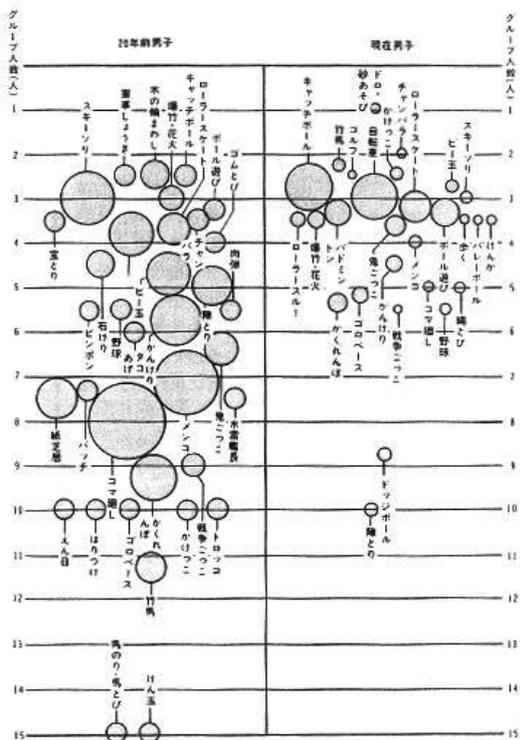
仙田満「子どもとあそび」より

図6：横浜市におけるあそび空間量（1974～90年）



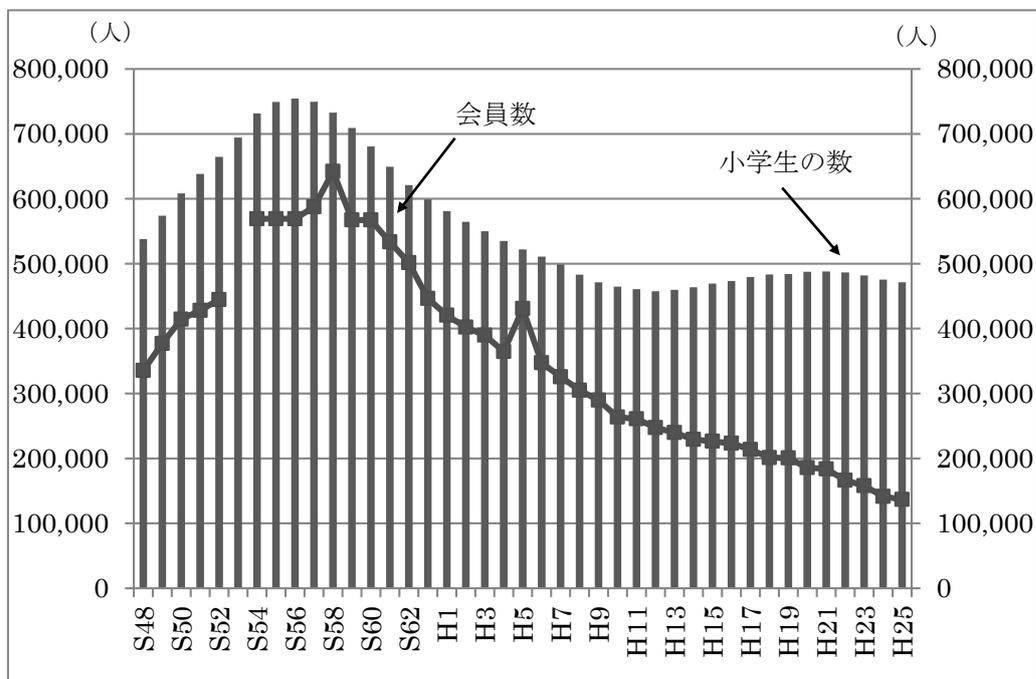
仙田満「子どもとあそび」より

図7：遊び集団の比較



中央法規出版「現代子ども大百科」より

図8：神奈川県内子ども会会員数の推移と小学校在学者数の推移



子ども会会員数：神奈川県立青少年センター調査 ※昭和53年は不明
 小学校在学者数：神奈川県「学校基本調査」

<背景>

- 子どもを外で遊ばせることへの風当たりが強い。子どもが遊ぶということに対して、大人が抵抗している構造があり、大人の遊べなさが子どもに移っている。
- 過剰に管理責任を迫及しがちな日本の社会が、子どもの「遊び」の縮小を助長している。

- 子どもを外で遊ばせることへの風当たりが強い。子どもが道路にチョークで絵を描いて、打ち水で消すという光景に、顔をしかめる大人が多かったということがあった。「私もやったな」とか「楽しそうだな」と、そこへ少しずつシフトしていく瞬間を大事にしたい。子どもが遊ぶということに対して、大人が抵抗している構造があるのではないか。「雪が降ったら楽しい」という、非日常の、楽しく遊べる道具かもしれないものが、「交通が麻痺して困る」というようなことに押し流されている。大人の遊べなさが子どもに移っている。
- 公園のダメづくし（○○してはいけません）の注意看板や、子どもを道路で遊ばせるのは親の責任放棄だといった大人たちの声に象徴されるように、過剰に管理責任を迫及しがちな日本の社会が、子どもの「遊び」の縮小を助長している。
- 子どもにとっての体験活動は、「仕組まれた体験」（大人になったときに役に立つという意味付けされた体験）と「偶発的な体験」（路地裏のかくれんぼや雑木林や裏山での冒険的遊びを通じて、未知の世界と出会い、新たな発見をする中で、創造性やファンタジーなど子どもの世界を充たしていく体験）の二つのベクトルで動いているが、「偶発的な体験」が多く見落とされている。
- また、子どもの居場所づくりも、当初は「子どもの存在欲求に寄り添った居場所づくり」という意味合いから始まったものが、制度化が進む中で、「秩序を維持形成する大人社会から見た居場所づくり」という方向で論じられるようになっていく。

<考察>

- 親だけではなく、友人や仲間との関係の中で、他者からケアされた存在承認の経験がなくなり、他者に関心を持ち、他者と関係をつくろうという意欲が切り崩されていくような状況が静かに起こっているのではないかと考えられる。
- 危険を察知できない、身体感覚が欠如している、失敗やトラブルに弱く極度に恐れる、世の中に答えがいくつもあるという実感が無いなどの子どもたちの状況は、経験の貧困が原因と考えられる。
- 子どもは地域から空間的に排除されることで、心理的な居場所まで奪われている。

- 最初に他者から無条件にケアされたという経験がないと、人に興味を持つ、社会に興味を持つ、何かに興味を持つということはそもそも起こらない。しかし、それは単に親だけの問題ではなく、子どもの友人や仲間との関係の中でも、親密な他者からのケアの存在承認というものは培われていく。社会をつくるということは、他者に関心を持ち、他者と関係をつくろうという意欲であるが、その部分が切り崩

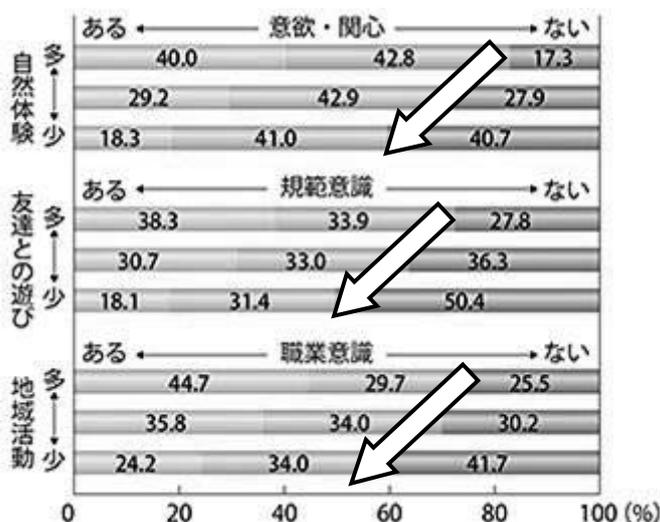
されていくような状況が静かに起こっているのではないかと考えられる。

- 危険を察知できない、身体感覚が欠如している、失敗やトラブルに弱く極度に恐れる、世の中に答えがいくつもあるという実感が無いなど、経験の貧困が原因と考えられる子どもたちの状況は、野外教育の指導員や小学校の校長などから聞くとこころである。
- かつて、英国政府が「遊びは、子どもが自分の生きている世界を知るための扉である」と表現していた。また、2008年にウェールズ政府が子どもの遊びに関する政府戦略を発表した際、大臣が「我が国の子どもは、経験の貧困に苦しんでいる」と発言している。
- 外で子どもを遊ばせたいと思う親は多いが、地域の方で、外では遊ぶなという視線が強く、大人が不寛容になり、子どもは、家と学校の間接地帯（地域）の居場所のなさを感じている。
- 子どもを空間的に排除する地域デザインが、子どもの心理的な居場所をも奪っている。
- 何かの役に立つことをしなくてはならないという暗黙のプレッシャーや、自分がここに存在して生きていることの意味が問われ続けている社会の中で、多くの若者が孤立感や孤独感を抱えており、人とつながれない、居場所がないと感じている。
- 都市でない立地しづらいつらサービス産業の進展に伴い、若者の都市志向が見られるが、都市化された地域ではコミュニティとしての結びつきや地域活動の経験が乏しい。

[参考] 子どもの頃の体験と大人になってからの意欲・関心等との関係

- 子どもの頃に自然体験、友だちとの遊び、地域活動が豊富であった人ほど、大人になってからの意欲や関心、規範意識、職業意識等が高い人が多い。

図9：子どもの頃の体験と大人になってからの意欲・関心等との関係



独立行政法人国立青少年教育振興機構
「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」(平成22年度調査)

補論：居場所について（大学生のアンケート結果から）

- 自分の家が居場所と答えた者が多かった。
- 心のよりどころになる時間は「ひとりでいるとき」「友人といるとき」「家族といるとき」
- 普段の遊び場は、ファーストフードやカフェ等の飲食店、自分の家、カラオケ、ボーリングなど商業施設

表 1：あなたにとっての居場所とはどんな場所ですか（Webアンケート結果から）

あなたにとっての居場所とはどんな場所ですか？最もあてはまるものから3つ以内でお答えください。（単一回答）	%
自分の家	80.4
恋人の家	7.1
SNS(LINE、Twitter等)	3.6
友人の家	1.8
学校	1.8
部活動、サークルの部室	1.8
地域の施設（コミュニティセンター、スポーツセンター）	0.0
図書館	0.0
ファーストフードやカフェ等の飲食店	0.0
カラオケ、ボーリング等の商業施設	0.0
アルバイト先	0.0
インターネット	0.0
ソーシャルゲーム（SNSアプリを使ったゲーム）	0.0
オンラインゲーム	0.0
その他	1.8
無回答	1.8

<グループインタビューから>

- ・ 居場所としての家は、まず自分自身を認めてくれる人がいる所。失敗したり挫折したりしても戻ってこられる場所があるから頑張れるのかもしれない。
- ・ 居場所は、善悪の判断をせずにまず一旦話を聞いてくれる場所。一旦気持ちを吐き出せて、ダメな自分もさらけ出せる関係だと思う。

表2：あなたの心のよりどころとなるのはどんな時間でしょうか（Webアンケート結果から）

あなたの心のよりどころとなるのはどんな時間でしょうか？ 最もあてはまるものから3つ以内でお答えください。 （単一回答）	%
ひとりでいるとき	28.6
友人といるとき	26.8
家族といるとき	25.0
恋人といるとき	12.5
部活動、サークルの仲間といるとき	3.6
SNS（LINE、Twitter）、インターネットを通じて人とつながっているとき	1.8
アルバイト先の人と一緒にいるとき	0.0
その他	0.0
無回答	1.8

<グループインタビューから>

- ・ 家の中でも、友だちとの間でも、それぞれ違う関わりがある。どっちでもリラックスしていて、優先順位がつけにくいところがあった。
- ・ 友だちの間では、その関係を壊さないというのが第一にある。家族だと違う経験をしているところから情報や意見をもらえたりする。

表3：普段の遊び場はどんな場所ですか（Webアンケート結果から）

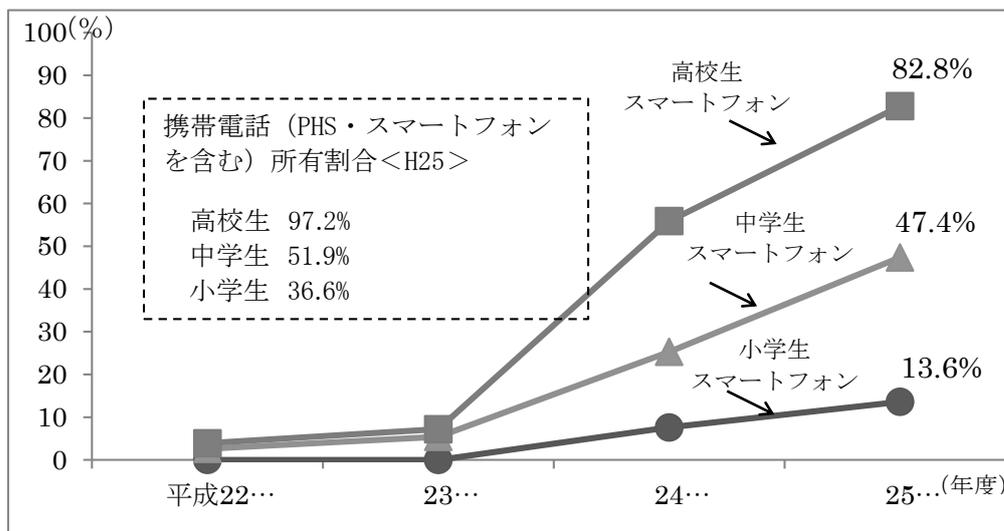
普段の遊び場はどんな場所ですか？最もあてはまるものから3つ以内でお答えください。（単一回答）	%
ファーストフードやカフェ等の飲食店	26.8
自分の家	23.2
カラオケ、ボーリングなど商業施設	16.1
学校	8.9
友人の家	7.1
地域の施設（コミュニティセンター、スポーツセンター）	3.6
恋人の家	1.8
部活動、サークルの部室	1.8
オンラインゲーム	1.8
図書館	0.0
ソーシャルゲーム（SNSアプリを使ったゲーム）	0.0
その他	5.4
無回答	3.6

3 高度情報社会への対応について

<現状>

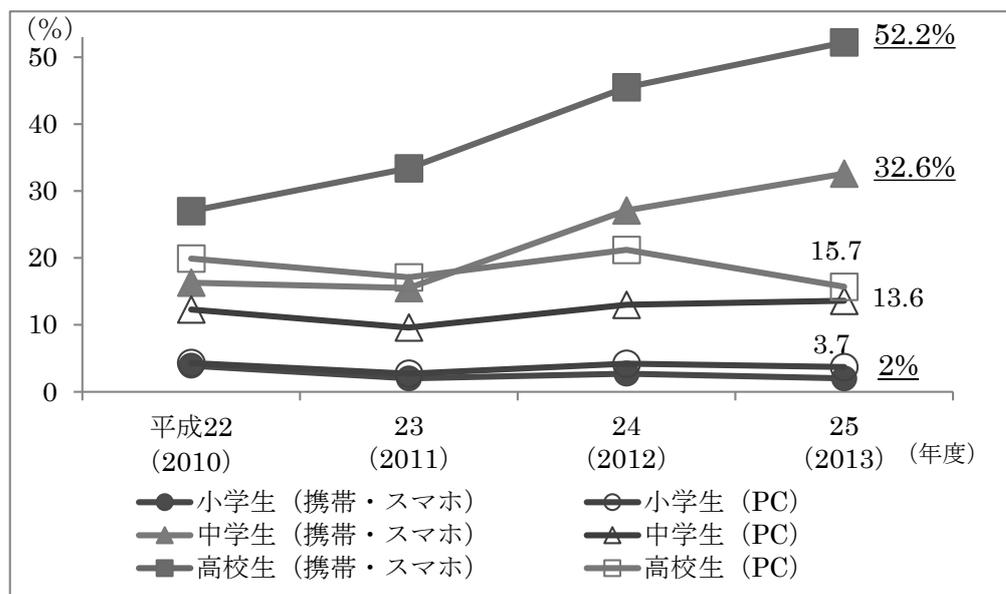
- 高校生の約8割、中学生の約半数、小学生の1割強がスマートフォンを持っている。
- 中学生、高校生において、携帯電話・スマートフォンを通じたインターネットの長時間利用割合が増加傾向にある。
- 大学生ボランティアへのアンケート結果から「インターネットはなくてはならない存在か」という質問に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合は、本人にとっては94.7%、子どもたちにとっては66.1%となった。
- 同アンケート結果より「LINEなどのSNSがなくてはならない存在か」という質問に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた割合は、本人にとっては82.2%、子どもたちにとっては66.1%となった。

図10：携帯電話（PHS・スマートフォンを含む）の利用状況 —持っている携帯電話の種類



内閣府「青少年のインターネット利用環境実態調査」

図11：携帯電話・スマートフォン及びパソコンを通じたインターネットの利用
— 1日2時間以上の利用割合の推移



内閣府「青少年のインターネット利用環境実態調査」

表4：インターネットはなくてはならない存在か（大学生のWebアンケート結果から）

インターネットはなくてはならないものになっていますか？（単一回答）	本人	子どもたち
そう思う	67.9	37.5
どちらかといえばそう思う	26.8	28.6
どちらでもない	0.0	12.5
あまりそう思わない	3.6	7.1
思わない	0.0	7.1
無回答	1.8	7.1

<主な理由>（Webアンケートの自由記述回答から）

[本人]

- ・ 情報を得る手段…「知りたい情報をすぐに検索できて便利だから」「ほとんど全ての情報をインターネットから得ているので」
- ・ 手続きの手段…「学校の時間割や課題提出など全てオンラインであるから」「美容院の予約などもネットを前提にしたものが増えてきたから」

[子どもたち]

- ・ 情報収集の手段…「学校の授業でも『ネットで調べてみよう』などの内容があるので、日々の生活に密着しているなあと感じます」「検索すればすぐわかるということが、子どもの頃から当たり前になっているため」など

表5：LINEなどのSNSはなくてはならない存在か（大学生のWebアンケート結果から）

LINE等のSNSはなくてはならないものになっていますか？ (単一回答)	本人	% 子どもたち
そう思う	30.4	37.5
どちらかといえばそう思う	51.8	28.6
どちらでもない	5.4	12.5
あまりそう思わない	5.4	12.5
思わない	5.4	1.8
無回答	1.8	7.1

<主な理由> (Webアンケートの自由記述回答から)

[本人]

- ・連絡手段…「友人や家族などとの連絡手段がLINEを使うことがほとんどで、LINEやTwitter等のSNS以外の連絡先を知らない人も多いため」
- ・複数人の連絡に便利…「大人数で何かする時はLINEを使うから。特にグループLINEでのやりとりに関して、LINEをやっていない人がいるとその人にだけ個別に連絡しないといけなくなり、手間や迷惑をかけることになるから」
- ・人とのつながりを感じられる…「SNSのようなツールがあるということで、人とつながっていると実感することができるため」
- ・その他…「周りが連絡手段として活用しているため、自分が必要かどうかだけでは判断できない」など

[子どもたち]

- ・クラスのグループLINE
…「LINEを始めなければ、クラスのグループLINEに入れずに仲間はずれになった気持ちになる。そのため、LINEやTwitterを始めざるを得ない、新しい暗黙の義務になっている気がする」「『新学期になり新しいクラスになった途端、そのクラスのLINEのグループができる』といった話や『中学入学祝いにスマホを買ってもらい、まずしたことはSNSの登録』などの話を子どもたちから聞くと、生活していく上で（特に友人関係）必要不可欠なものになっているんだなあと感じます」「ないと仲間外れになる」など

<考察>

- サイバー空間で流通する情報は部分的なため、他者とのつながり方も部分的となりがちである。
- サイバー空間における他者との関係性の充実が、そのまま信頼関係の構築や自己肯定感の充実につながらない傾向がある。
- SNSでは発言がグループ全員に見られ、現実の世界より相互監視が強く、全員がつながりあう息苦しさがある。

- SNS（LINEやFacebook等）など、サイバー空間におけるコミュニケーションの特徴として、下記の点が挙げられる。
 - ・ 流通する情報が部分的なため、他者とのつながり方も部分的となりがちである。
 - ・ サイバー空間における他者との関係性の充実が、そのまま信頼関係の構築や自己肯定感の充実につながらない傾向がある。
- SNSでは発言がグループ全員に見られ、現実の世界より相互監視が強く、全員がつながりあう息苦しさがある。
- スマートフォンの普及に伴い、インターネットの利用時間が増え、依存傾向も高まる中、依存度が高いと回答した生徒は、現実の友だちが少なく、身近な人間関係や学校生活に不満を有している割合が顕著に高い。
- 自分と友だちが異なる価値観を有していて、相互に尊重すべき存在であるという意識が持てず、すぐに返信がないと不安になったり、自分たちと少し意見が違うといじめのトラブルに発展する危険性がある。
- 現実の世界で上手にコミュニケーションを図れない青少年は、インターネット上でトラブルに遭遇する傾向が見られる。
- インターネットの関わりは、通信機能のあるゲーム機などを通して低学年（小学校2年生くらい）までに及んでいる。
- インターネットの世界は、その向こうに生身の人間がいるということが感じられない、他者が喪失してしまう世界であり、閉じられた空間でコックピットに座って自分で操作しているような感覚に陥りがちである。そうすると、個人がまるでカプセルの中で自立・確立しているように見えるが、逆説的に、自分が存在しているという感覚がどんどん失われていく。
- 現実の世界では、生身の他者に出会ってぶつかり、如何ともしがたいものに跳ね返されたりすることで、逆に自分の存在がここにあると感じられるのだろうが、インターネットはそこが欠落しがちで、個の感覚が一層不明瞭になるというシステムになっている。
- インターネットやSNSの発展というメディア環境の変化は、情報量だけでなく、マスメディアによる一方向からの情報発信から双方向の情報発信という質的な変化も伴っている。「自分が誰かを見る」と同時に「常に自分自身が人に見られてしまう」ことが常態化している。

<参考：大学生のグループインタビューから>

- SNSのトラブルの事例をみると、これを言ったら人が傷つくと思っていない。それでぼんぼん会話をしてしまうけれど、相手の顔が見えないから、傷ついているのに気づかない。それで暴力などに発展していく。
- 子どもたちが一人で抱えてしまっているところがある。休み時間も、話さずにずっとそれぞれスマホを見ていたりする。高校生同士、休み時間に一緒に遊ぶことがないのは、大学生の自分ですらびっくりした。自分たちは、サッカーとかを少しでも時間があればやりにいっていた。

1 若者の社会・職業への移行について

多様な自立を認め、支える

～多様な働き方や生き方を一人ひとりが描くことができる社会をめざす

- 正社員になることを最終目標とするような支援だけではなく、多様な働き方・生き方を示していかなければ閉塞感が拭えない。
- 正規と非正規という二極化ではなくて、地域限定、職種限定など、多様な正社員という考え方・働き方をもっと広めていこうという議論もある。また、会社から独立した働き方やジョブ型の働き方を確立する、あるいは非正規の賃金水準を上げ、それだけで食べていけるようなモデルも大事である。
- 非正規との資源配分の格差が大きいままの状態、正社員を理想化しない社会に移行するのは難しいことから、まずは非正規の教育訓練を外部から支援しつつジョブ型の労働市場に移行していくことも、過渡期における一つの方向である。
- サービス産業化が今後も進んでいくと考える時に、非正規雇用を正規にしていく、またはある種の専門性を身につけさせて、青少年に職業的なキャリア形成を促すということは困難という指摘もある。
- 仮に職業上の挫折があったとしても、既存のモデルにはめ込むような支援施策を展開するのではなく、多様な働き方や生き方のモデルを示すことによって、一人ひとりが主体的に生涯を描いていくことができる環境を整えていくことが必要である。

働く・学ぶ・生きるを支える

～日々共に暮らしをつくる、自ら働きかけるという経験から、仕事の意味を学ぶ

- 消費社会化する中で、様々なサービスを与えられるだけの受身の存在から主体としての存在になるには、自ら考え働きかける経験を、小さな頃から積むことが必要と考えられる。
- 日本の場合、若者の自立のプロセスの中で、地域が受けとめ基盤となっていた部分が、地域の役割の減少と共に後退してしまった。現代は、その無くした部分が重要になってきている。
- 職業上の自立段階にある若者のための場づくりを考えると、働くことの問い直し、つまり稼ぎとしての仕事だけではない、日々共に暮らしをつくるという意味の仕事に復権することが必要であろう。例えば、働くこと・学ぶこと・生きることを分離して捉えるのではなく、それらが入り交じった見方をするという意識することも大事である。居場所を別に得ながら、働く場も得るといった発想もある。

2 子ども・若者の地域活動について

信頼をはぐくむ

～子ども・若者が他者を信頼し社会と関わる意欲を育てる

- 若い人たちの「自立」という言葉の受け止め方は、どちらかというとなりで立つ、孤立するというニュアンスが強いが、そうではなく、他人と共に支え合って生きていくという意味で、相互依存の中での自立であると社会全体が受け止めるのが、今の時代に相応しいと考えられる。
- 大学のゼミの活動の中で、学生がグループで行うインタビュー調査が、一つのイニシエーションとなっている。皆の話を聞いて時間をかけてコミットして取り組むという経験自体が、自分たちが安心して共同活動し、自分たちが承認されつつ、他の価値観を受け入れていくという仕組みになっている。
- 社会との前向きな関係をどうつくり出していくのか、「生活上の自立」「相互依存的な中での自立」「職業的な自立」のうち「相互依存的な中での自立」について、相互依存的な関係をつくりつつも、その人の持つ自立というものをどう導き出していくのか、という議論をしていく必要がある。
- 社会における連帯には自立した個人の存在が大事であるが、日本ではそのことが見過ごされている。連帯のための自立ということをどのように教え、どのようにそのことを実感できる社会にしていくかが大事であろう。
- 例えば、北欧型の自立観は、強い個人を育むという印象が強いが、そうした面と同時に、手を携え共に社会を築いていく、そして若者が社会に参加できるということが前提にあり、自立に向かうための社会的な基盤が分厚い。ただし、歴史、文化、風土が異なるので、そのまま当てはめるのは誤りであり、日本の現状に合った自立を模索する必要がある。

参画を支援する

～子ども・若者・大人が同じ目線で社会に参画する機会をつくる

- 同時代を生きながら、大人も子ども・若者も、生活者として共に暮らしを営んでいるのであるから、大人が子ども・若者の自立・自律に向けて何かをするということだけではなく、共にそこで共同して生活をつくる生活者としての視点があってよい。それは、単に住むとか食るとかの生活ということだけでなく、一緒に生きていくという意味があり、言い換えれば、大人も子どもに関わることで、生きていくことが豊かになるということである。それゆえ、大人のみならず、子ども・若者の「参画」という視点が不可欠である。

- 現在の社会の中で、個人とは確立すべきことなのかという根本的な議論がある。流動化が激しい社会の中では、一度、ある確立した状態になったら終わりということではなく、常に社会の状況を見据え、他者との関係性も組み替えながら、おそらく一生自己形成の途上にあり続けるという形になってきている。自己形成は、子ども・若者だけの問題ではなく、大人も当事者に含めて考えるべき問題となっている。
- 若い世代と上の世代とで、働くこと、子育て、政策の捉え方等に関して、考え方や意識の面で大きな違いがあり、世代間の価値観の隔絶が、社会を構成していく上で決定的な問題となると考えられる。地域やコミュニティづくりの中で、色々なセクターが協力して一つの方向に向かう、横に広がって皆が協力する、ということも必要だが、もっと縦に連携・連結して新しい時代をつくっていかないと、日本の社会そのものがもたなくなるのではないかという危機感を広く共有していく必要がある。

3 高度情報社会への対応について

縁をつなぐ

～顔の見える他者との関係づくりを支える

- 子ども・若者が社会とどう関わりを持っていくのかを考える上で、サイバー空間というバーチャルな場面でのコミュニティ形成の問題を考える必要がある。
- 若者の自立支援は、バーチャルの世界の拡充を前提とし、サイバー空間におけるバーチャルなコミュニケーションでは関係性の構築・充実につながりにくいという特徴を踏まえて、リアルな部分でのコミュニティ形成などの施策をどう充実していくかを議論する必要がある。
- 若者の人間関係に対する苦手意識には、サイバー空間でのコミュニケーションが中心で、実体験を通じてつながる縁というものを経験してこなかった経験不足の影響が考えられ、子ども・若者にとってのサイバー空間でのコミュニケーションのウエイトが大きくなっていることの意味を無視できなくなっている。
- インターネット利用の問題は、インターネット・モラルの中だけで解決しようとするものではないであろう。顔の見える他者との関係をつくることのできる小さな場がいくつもあって、そこでしっかりと他者感覚を育んだ上でインターネットの世界に行くのであれば、相手のことも感じられ、思いやりや配慮が働くようになると考えられる。
- グループインタビューで、ボランティア活動等を通じて子どもに接している大学生の話の聞くと、多くの子どもが、SNSで悩みやトラブルに遭遇しても、親や教師は当てにならない、相談しても多分わかってもらえない、と思っているようであった。SNSでのトラブルは目に見えにくいので、大人が助けるのが難しい、また子どもたち側からも、大人はあまり頼りにされていないということを認識した上で、どのようにサポートできるかを考える必要がある。

- インターネット上の関係とリアルの世界での人間関係は、別々のものではなく重なっている場合もあり、リアルな人間関係を保つためにSNSなどを使わざるを得ない、またSNSでの関係が実際の人間関係にも影響してくる、という面もある。インターネットによって、これまでとは違った関係づくりが生まれており、それを前提にして、人と人との関係や縁を、どうつなぎ直していくのかということが問われている。

想像力をはぐくみ、体験的な学びを支援する

～つくり込まれた社会の中で、つくる側に回る体験から自律する力を養う

- インターネットを学習するには、インターネットをどのように使うかというよりも、高度情報社会のつくり込まれた社会の中で、つくる側に回る体験、既につくられたものが、なぜそうなっているのかということがわかり、風景がガラッと変わるような、既に知っているものの捉え方がひっくり返ってような体験を通じた学習が必要ではないか。
- インターネットがどのようにできているのか、という学びに必要な想像力は、知識ではなく、メディア技術を活かした体験的な学習（映像制作や心臓の動きを感じるデバイスを使ったワークショップ）を通じた、他者との共感的なコミュニケーションの中から育てていくことができるのではないか。
- 高校生が、ゲームと寸劇を交えて、小中学生にSNSの楽しさと利用の仕方を教えるプログラムがある。面白い、危ない、という点を体感でき、一時的に座学で教えるよりも、はるかに訴えるものが大きいと感じた。
- こういうことが理想・規範であり、これを身につけさせるというのが学校教育の基本的な構造だとしたとき、インターネットの世界というのは、規範があるのかわからないという、確立していないところが最大の特徴であると捉えられる。確立している規範が既に存在しているという前提で、これを身につけなさい、ここを目指して自己を確立しなさい、自立しなさいということには無理がある。インターネット利用の問題を考えるとときの認識は、青少年の自立・自律を考えるとときの基本的な認識であることがいえる。

補論：自立・参加・共生について（大学生のアンケート結果から）

- 若者の社会・職業への移行が、個人化・多様化・流動化する中で、自ら実際に行動して、試行錯誤をしてみて、自分がどのように感じているかを体験として感じることの重要性は増してきている。
- インタビューに参加した大学生は、実際に社会参加し、支援を行っていた。自分なりに噛み砕いて理解し、行動してみることができた場合に、対人関係を学び、自分が何をしていきたいのかを知ることができるのではないだろうか。
- 一方で、主体的に行動できるタイプである大学生から見て「大半の学生が、仕事や社会に対して今からどうしたらいいかわからず動けない」との発言があった。このような状況が、いずれ劣等感となって、困難を有する青少年となるのではないかと考えられる。

<Webアンケートの結果からの考察>

- 支援を通じて印象に残ったことの多くは、感謝されて嬉しかった体験、支援する側の本人がつながりを再確認できることなどであった。
- 動機についても社会的な必要性を感じてというよりは「子どもが好き」など触れ合いを求めるものが多く見られた。
- 支援に携わっている大学生が求めているのは、顔が見える相互交流の中での存在承認であり、互いに関わりあっていることによる充実した関係性が、活動を担う意義であり彼らを下支えしているということが読み取れた。
- 直接的な人間同士の交流を求める気持ちをどのように伸ばしていくか、それが子どもや若者の健全な成長を考える上で非常に重要になってくるのではないだろうか。
- その意味で、今回の調査に参加してくれた大学生は、自ら人と触れ合う体験を求め行動できているともいえる。

<グループインタビュー結果からの考察>

- 自ら何かを始めたり物事を動かしたりする時に、周りの大人から厳しい意見を言われても、それを自分のエネルギーにするという発言があり、困難を抱えて動けない若者と思いが真逆であると驚かされた。
- また「わからない重りをつけられることが『責任』ということで、それまでは自分の発想を簡単に行動に移していたことが、できなくなるということなのではないか」との発言があり、責任の重さをリスクと一緒に考えていることが伺えた。
- こうした経験を通じて、大人に対して、単に反発を感じるだけでなく、年齢ではなく人として交流することの大切さを語れる人もいた。
- 仕事については、やりがいに加え、収入、安定など生活に必要な点を現実的に判断する人が多かった。
- なお、支援をしていて気になっていることとして「居場所づくり」「社会参画の機会」「コミュニケーションの場づくり」などが挙げられており、青少年支援を考える上で、これらに力を入れるべきである。

第4章 青少年の自立・自律をどう支えるか

1 成長と自立を支える一体的な取組み

[目指す方向]

- (1) 自立をはぐくむ社会参画・共生
- (2) 子どもの発想から生まれる「遊び」を保障する
- (3) キャリア・デザインを支援する

(1) 自立をはぐくむ社会参画・共生

- 社会の構造的転換の中で、これまでの日本型自立モデルから排除される若者が増加し、若者の自立がより困難になっている。若者の自立は、元々は社会が支えていたが、近年は、「新卒一括採用」「企業内訓練」を軸に、企業が果たす役割が大きくなっていった。これからは、多様な生き方・働き方という観点から、企業と共に社会も自立を支える仕組みに立て直す必要がある。
- 若者の孤立化・孤独化が進行している中、いきなり自立を促すのではなく、「依存してもよい」という所から始める。相互依存関係を尊重し、そこから徐々に自立というものについて「あなたはどうするの?」という形で、依存しつつ自己肯定感も培うことができる「場」、つまり関係性を構築し自立も支援するという2つの視点を持っている「場」を通じて、若者の社会参画を支援することが求められている。

(2) 子どもの発想から生まれる「遊び」を保障する

- 子どもの体験活動の中で見落とされがちな「偶発的な体験」のもつ意義に光を当てる必要がある。「偶発的な体験」とは、子ども時代に、皆がごく自然に、大人のまなざしから離れて、自分たちでごっこ遊びをしたり、或いはどこか路地裏に行き、かくれんぼをしたり鬼ごっこをしたり、山や川や海に行き、大人から見るとちょっとハラハラドキドキ危ないような冒険的な遊びをして、そこで色々なものを感じ取る、時には未知の世界に出くわし、驚きと共に新しい世界を発見する、というような子どもにとっての自律的・自発的な体験である。
- このような子ども自身の自律的な探索や遊びの中で、今ここに生きている生命としての自己が充足していける時空間をいかに保障するかが課題である。
- 「遊び」が失われていく現状において、遊びとは、失敗するということを体で学ぶ重要な体験の一つであり、遊びが失われることで、子どもたちは、体験や人間関係などの土台ができないうちに大人になってしまう、という危機意識を改めて持つことが重要である。
- 若者の自立の問題は、乳幼児期から地続きのものである。子どもが自ら自分の今を決める、自分の発想が大事にされる、面白いと思ったことが受け止められるということを保障する社会であるべきであろう。

- 計画しない、自然と生まれる体験や学びを、いかに大人が社会に創出するかというデザインが大事である。

(3) キャリア・デザインを支援する

- 現在のキャリア教育は職業に関して狭い範囲の教育を担っていると考えられるが、「学校卒業後も、生涯学び続けていく姿勢を身につける」「就職できたら終わりではなく、自分の人生を引き受けていく『キャリア・デザイン』のマインドを持って行動する」といった、広い意味でのキャリア教育の実現が望ましい。[※]
- スキルがない状態で採用し、企業が訓練するというシステムの日本では、スキルを通じたキャリア教育はしづらい。
- そうした中で、インターンシップの充実は、断片的な情報により固定化された職業イメージなどが、経験をすることによって変化し、分断されていた「働くこと」と「学ぶこと」と「生きること」といった概念が融合されるといった効果が期待できる。新卒学生と企業とのミスマッチを少なくすることや、将来の産業界を引っ張るリーダー人材を育てるといった役割を期待することができる。
- 情報社会の中で細かい情報は入ってくるものの、ゆっくり時間をかけて系統立った話を聞くという機会が少ない若者に、時間をかけて全く違う立場の人の話を聞き、自分で考えるという機会、多様な価値観に触れる機会を増やすことなども、キャリア教育として有益だと考えられる。

2 自立・参加・共生を実現する子ども・若者の居場所づくり

[目指す方向]

- (1) 顔の見える小さな場、社会とつながる場をつくる
- (2) 寄り添える場をつくる
- (3) 民間が活動しやすい環境を整え、連携をコーディネートする

(1) 顔の見える小さな場、社会とつながる場をつくる

- 多様な他者・世代の相互承認の場をつくるにあたってのこれからの考え方として、共助の世界を豊かにすること、自由にふるまい、様々なことに挑戦していきること、顔の見える小さな場と小さな社会をつくること、といったことが挙げられる。
- 若者の孤立化・孤独化の問題に対しては、従来の方の整備や住民の組織化支援（公民館や社会教育団体づくり）といった取組みを、社会とつながる場として位置付け・意味付けし、拡充して、今の時代や若者に合ったものに変える必要がある。

※ 神奈川県立高校は、「県立高校におけるキャリア教育の推進について(指針)」(平成25年3月)に基づいて、学校ごとに指導計画であるキャリア教育実践プログラムを作成し、すべての教育活動を通じてキャリア教育に取り組んでいる。県立高校のキャリア教育は、人や社会と関わりながら、生涯にわたって「自分らしい生き方」を実現させていくことを念頭に、社会人・職業人として自立していくために必要な能力・態度を育成することを目的としている。

(2) 寄り添える場をつくる

- 子どもの地域活動の活性化を考える上で、性の問題や、老いる、病む、死、挫折など、学校教育的なフレームから抜け落ちている側面に寄り添える場をつくり、子ども・若者と大人とが、共に社会をつくるパートナーとなる関係にチェンジさせる必要がある。

(3) 民間が活動しやすい環境を整え、連携をコーディネートする

- 今の若者たちは多種多様で、複雑で、自分の好きな世界がはっきりあるので、行政で全部を支援するのは難しい面がある。行政は、社会の課題に関するデータを持っているので、民間でその課題に取り組もうとする人々（ソーシャルビジネスに携わりたい人など）と連携して、課題の解決を進めることが一つのゴールとなる。よって、民間の人々が活動しやすい環境を整えることなども、行政の視点の一つである。
- 生きづらさを抱える子どもの居場所ともなる冒険遊び場、児童館、放課後児童クラブなどの施設に、就労支援等に取り組む団体の情報提供や連携があれば、一層の広がりが持てる。

3 困難を有する子ども・若者とその家族の支援

[目指す方向]

- (1) 様々な人が参加できる居場所をつくる
- (2) 自立が難しい若者へ包摂的な支援を展開する
- (3) 困難を有する子ども・若者を様々な主体が連携し支える

(1) 様々な人が参加できる居場所をつくる

- 国立市の公民館が行っている「コーヒーハウス」という事業では、「障害者青年教室」という、障害の有無に関わらず共に活動を楽しむ空間づくりが行われている。障害を持っている人たちは、社会と接点を持ちづらいため、障害のある人もない人も「障害者青年教室」に来てもらって、楽しい活動、面白い活動をしようという取り組みである。
- 様々な事情を抱える人たちが、こういった一つの場に集まることで、相手を受け入れる、相互に相手を認める、社会参加の場をつくる必要がある。

(2) 自立が難しい若者へ包摂的な支援を展開する

- 自立が難しい若者の問題は、家族が社会から孤立していることも背景にあり、本人の周辺を含めた包摂的な支援が必要となっている。孤立のおそれがある家族（特に母親）を、地域で支える動きが出てくるとよい。
- 各省庁それぞれが施策を展開しているが、地方行政には、これらの施策をいかに子ども・若者の現実に沿った支援に連動させて組み立てていくかが求められている。

- ハローワークなどで就職活動をしている求職型無業者、就職希望はあるが就職活動は行っていない非求職型無業者、就職を希望していない非希望型無業者と、無業の若者には段階がある。夢も希望も持っていない非希望型の状態から意欲を出して希望を持てるようにするには、段階を踏む必要があり、いきなり求職型には向かえない。無業の若者が前に進むために、今はどこの段階にいるのか、状況に合わせて寄り添う必要がある。
- また、若者の就労支援機関が利用者の状況に応じてつくっている、これまで暗黙のうちに身に付けてきたものを可視化し、段階的に整理した支援プログラムは、現役の大学生にも応用できる。

(3) 困難を有する子ども・若者を様々な主体が連携し支える

- 困難を抱える多様な子ども・若者がいる中で、成長過程の各段階において、育て方を保障してあげる、助けてあげる仕組みにより、問題を就労の段階までに先送りにしないことが大事である。若者の課題ごとに縦割りになりがちな施策をクロスオーバーさせて、自立の段階に応じた支援や場づくりなどを進めていく必要がある。
- 課題を持つ若者たちを社会全体で支援することを目的とする「子ども・若者育成支援推進法」における「地域協議会」は、ネットワークをつくるための仕掛けであるが、これはきっかけであって、組織間において顔の見える関係が形成されなければ有機的に動かないであろう。
- また、企画調整部会において、インターンシップに挑戦する意識の高い学生の事例と、就労支援を受ける生きづらさを抱える若者の事例が発表されたが、全く違う若者同士の話ではなく、同じ背景の中での若者の課題と考えられる。これらの若者を支援する二つの取組みが、全く違う分野として、各々の業界をつくるのではなく、関わり合うことが望ましい。

4 高度情報社会で自律できる環境づくり

[目指す方向]

- (1) 顔が見える場でのコミュニケーション・人間関係を前提にする
- (2) 子どもと若者が自らリテラシーを高める
- (3) メディア技術等を活用した新しい体験学習から学ぶ
- (4) 大人がメディアとの付き合い方を考える

(1) 顔が見える場でのコミュニケーション・人間関係を前提にする

- サイバー空間、或いはバーチャルなコミュニケーションのみでは、互いの関係性、特に信頼関係の構築にはつながらないのではないかと考えられる。バーチャルな世界が拡充していることを前提にしつつも、リアルな部分でのコミュニケーションの取組みや場づくりの支援を考えていく必要がある。

(2) 子どもと若者が自らリテラシーを高める

- 青少年の安全安心なインターネット利活用のためには、青少年の目線で「家庭」でできること、「地域社会」と、又は「学校」と連携してできることを模索していかなければならない。その際に重要なのは、「使用目的を意識して道具に過ぎないインターネット・ツール等に振り回されない力をつける」「情報発信者の意図を見極める力をつける」といった、リテラシー向上の体験が繰り返し得られる環境をつくる」ということである。
- 青少年の気づきの学びの場を設ける取組み例
 - ・高校生による、ゲームと寸劇を交えた小・中学生向けのSNS利用を教えるプログラム
 - ・高校生が主体的に制作する高校生向けマナーハンドブック など
- 保護者のインターネット・リテラシーを向上する取組み例
 - ・中学校入学説明会などの機会を捉えた啓発普及 など
- 青少年の安全安心なインターネットの利活用には、当事者である青少年の同世代や下の世代に向けた活動が効果的と考えられており、そうした高校生・大学生による啓発の取組みの拡大を、教育関係者がサポートする仕掛けが必要だろう。

(3) メディア技術等を活用した新しい体験学習から学ぶ

- 高度情報社会のつくり込まれた世界の中で、自分がつくる側に回る体験は、既につくられたものが、なぜそうなっているのかということがわかり、風景がガラッと変わる、知っているものの捉え方がひっくり返っていくような体験学習となることが特徴である。
- 学びを「社会をつくることへの参加と関心」とすれば、インターネットは既に社会をつくっている基盤の一つであるから、それを利用して学ぶだけではなく、つくる仕組みを通じた学びが重要となる。その時に、想像力が重要となる。想像力とは、知識ではなく、体験を通じて何か自分の中に思い描くことができる力だとすると、そこに体験学習の重要性があるのではないか。
- メディア技術を使って想像力を伸ばす・引き出す、またこれまでにない他者との共感的なコミュニケーションの場をつくるということが大切である。

(4) 大人がメディアとの付き合い方を考える

- 大人のメディアリテラシー、メディアとの付き合い方は、子どもの感性に影響を与える。大人がどのようにメディアに接しているかということを通じて、子どもは多くを学んでいる。

参 考 編

参考編 子ども・若者の意識や実態について

<調査内容>

子ども・若者支援に関するボランティア活動に携わっている大学生を対象に、以下の内容で構成

- ・Webアンケート調査
- ・グループインタビュー調査

<Webアンケート調査について>

- ・実施期間 平成27年7月16日～8月31日
- ・投稿数 56件
- ・主なアンケート項目
居場所について／インターネットやSNSについて／今支援をしていて感じること

<グループインタビュー調査について>

- ・実施日 平成27年8月5日 10時～12時
- ・参加者数 Webアンケートに投稿し、グループインタビューへの参加を希望した7名の大学生
- ・主なインタビュー項目
居場所について／インターネットやSNSについて／今支援をしていて感じること

1 Webアンケート結果の概要

(1) 属性

① 大学何年生ですか？

(単一回答)	%
1年	8.9
2年	23.2
3年	39.3
4年	26.8
無回答	1.8

② 性別は？

(単一回答)	%
男性	33.9
女性	66.1

③ どんな分野で活動されていますか？

(複数回答)	%
学習支援	42.9
困難を抱える子ども・若者への支援	21.4
放課後活動（児童館・学童等）	14.3
スポーツ	8.9
その他	19.6
無回答	19.6

(2) 社会参加について ※全回答を記載

① 支援に関わりたと思った理由をご自由にお書き下さい。

区分	回答
好き	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティアをすることが好きで、子どもが好きであるため。また、以前被災地に行き、遊び場の少ない子どもたちの現状に何か力になりたいと思ったため。 ・ 被災地の現状を自分の目で見てみたかったのと、子どもが好きだったため。 ・ 子どもが好きだから。子どものうちにモラルがつくと思うから。モラルが欠如している大人が多すぎると感じる。 ・ 癒されたかった。 ・ 被災地を自分の目で見たかったため、支援活動には参加しました。そして、現地の子どものと交流していくうちに、単純に「また会いたい」と思ったので支援を続けています。 ・ 子どもが好きだから（2件）
仕事につながる	<ul style="list-style-type: none"> ・ その時、教員志望だったから。 ・ 福祉関係のアルバイトがしたかったから。 ・ 将来、学校の教員として働きたいと考えているので、子どもたちのことを知りたいと思い、参加しました。 ・ 子どもの教育に興味があり、将来このような職に就きたいから。 ・ 将来のやりたい仕事に繋がるから。
大人になる・成長する	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの頃思っていた、子どもなりの意見、考えを、忘れない大人になりたいと思ったから。 ・ 子どもと共に成長したい。 ・ 人として自分が成長できると思ったからです。 ・ 子どもたちの立場に立ち、何かできることがあるかをその場で考えて対応できる人になりたかったから。 ・ 子どものために自分には何ができるのか、子どもが何に困っているのかということを実践を通して学びたかったからです。 ・ 座学ではなくて経験でしか学べないことを体験してみたかった。

区分	回答
参加したい	<ul style="list-style-type: none"> ・「何かしたい」という思いを形にしたかったため。児童分野に関心があった。 ・子どもの生活の支援をしたいから。 ・自分が最初は支援される側において、その中で学年が上がるにつれ、自分もサポートしてみたいと思ったから。 ・役に立てると思ったから。 ・子どもたちと関わりたい、勉強を教えたいと思ったから。 ・困難のある子どもへの支援を行いたいから。 ・自分を認めてくれる大人や仲間の存在が近くにいるという、家や学校とは違う居場所の存在が少ない。また、居場所の選択肢の1つになりたいと思ったから。
危機意識	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の活動に参加する子どもが少なくなり危機感を覚えたから。 ・単純にいい人間になってほしい、自分のようなやっつけはいけない失敗をしてほしくないためです。やっつけいい失敗はどんどんさせますが、取り返しのつかない失敗は絶対にやらせないように顧問の先生と一緒に指導しています。あと部活だけでいえば、自分よりも強くなってほしい、自分たちの時よりもいい経験をし、高校生活やそれ以降の人生に役立ててほしいと考えているためです。自分たちにはなかった環境を与えることで、新たな発見や自分の未熟さに気づいてほしいなと思っています。
興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> ・自分とは違う環境で育った子たちを見てみたいと思ったから。 ・子どもたちがどのように成長しているか興味があったし、それに対する大人の見解にも興味があったから。 ・先輩から誘われ、今までそのような活動に携わったことが全くなかったので、単純な興味で最初は始めました。 ・中高と他県で子ども対象のキャンプのボランティアをやっていたので、地元の活動に興味を湧いたから。 ・発達障害を抱える子どもや学生の存在を知り、そのような人々とその家族の支援がしたいと思ったため。 ・身近な存在だから。

② 支援をしていて、嬉しかったことや、悲しかったことなど、心に残るエピソードをご自由にお書きください。

区分	回答
笑顔を見られた	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊んでいる子どもたちの笑顔を見れたことが一番嬉しかった。 ・子どもは無邪気。 ・子どもの笑顔や、楽しかったと思ってくれることが嬉しい。楽しいという感情は想像以上に大事なものであると考える。 ・カンボジアの小学校で英語・日本語を教えるというボランティアに参加して、子どもたちの笑顔に感動した。日本の子どもたちよりも学校が大好きで、遠くから毎日通っている。貧しくても精一杯生きて、多くの子どもたちが夢を持っており、もっと支援をして良い環境を与えられれば、立派な「大人」になれると感じた。生まれた環境の違いはどうすることもできないので、裕福な私たちが支援をしてあげるべきだと思った。 ・ちょっとしたことにでも大爆笑できるところはすごいなと思った。

区分	回答
感謝された	<ul style="list-style-type: none"> ・「ありがとう」と笑顔で言われること。 ・名前を覚えてもらったり、感謝の言葉を言われると、やっけていて良かったと感じる。 ・指導した後輩が自分に勝った時は悔しさももちろんありますが、教えたことが少しあっていた気がして嬉しくも感じました。現役を引退して4年経ちましたが、それでも自分のアドバイスを聞いてくれたおかげでここまで成長してくれたのは何よりも嬉しくなり、その後に感謝の言葉を言われた際は涙も出そうになりました。今年度でコーチは退きますがこれまで以上にやり続ければ、このようなことが増えるのかなと思うと、より指導にも力が入ります。 ・ありがとうという言葉が子どもの口から自然と出たことと、活動をする中で、私とペアになりたいと言ってくれたことが、とても嬉しかったです。
役に立てた	<ul style="list-style-type: none"> ・教えている子が、問題を解いていてわかった時は嬉しかった。 ・お互いに楽しく勉強ができると嬉しいです。子どもからも学ぶことが多く、勉強になります。 ・自己満足かもしれないですが、自分も勉強でき、相手の勉強にもなっているということが、互いに喜びを感じることができるので嬉しかったです。 ・自分のみていた子どもが高校合格の報告をしてくれた時は嬉しかったです。一方で、ボランティアの限界を感じることも多く、自分がはたして本当に関わった意味があったのだろうか…と考えることもあります。 ・「わかった」時の表情は、教えていると嬉しく感じる。 ・嬉しかったことは、支援をして子どもが学習がし易くなったと話してくれたことや、親御さんから助かったと言われたこと。悲しかったことは、学校の先生の中には、発達障害の子をクラス全員の前で笑い者にしたり、激しく怒ったりすることがあり、理解しようという気持ちを持たない人も多くいると知ったことである。
受け入れてくれた、心が通じた、分かち合えた	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が、家や学校にいる時よりも安心できる、本当の自分が出せると話していた時。 ・自分たちの考えた遊びを楽しんでくれたり、子どもから話しかけてくれたこと。学校のちょっとした悩み（恋愛や勉強等）を話して「お姉さんが小学校の時どうだった？」と聞いてくれたこと。 ・子どもと喜びを分かちあえた時。 ・現地の方が自分たちを受け入れてくれることが嬉しいです。 ・支援で、外の団体の方にお世話になる時、その団体にいた人見知りの子と一緒に勉強などをしていくうちに、心を開いてくれたのが嬉しかったです。 ・サプライズで寄せ書きを最終日にもらった時は、思わず泣きました（笑） ・子どもたちが話しかけてくる時は嬉しかったです。 ・不登校の支援をしていた際、その生徒さんの卒業と同時に別れの手紙を頂いて、その内容が「不登校になってよかったよ」と言ってくれたこと。

区分	回答
(受け入れてくれた、心が通じた、分かち合えた)	<ul style="list-style-type: none"> ・新しいつながりが感じられたこと、自分の力不足で関係が築けなかったこと。 ・主に肢体不自由、知的障害児者の支援をしているのですが、ある女の子は初対面の時、目も合わせてくれませんでした。だんだん女の子のペースがわかってきて互いの距離に気をつけてすごしていると、次第に距離が近くなり、向こうから手をつないでくれたり目で何か伝えようとしてくれたりしました。とても嬉しかったです。
成長した	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな活動でも楽しんでもらえると嬉しい。できる限りのことをしても消極的な子がいると悲しい。一緒に活動する仲間の評価されると嬉しい。 ・諦めなければ少しずつ想いはつながること。

③ 支援をしていて気になっていること、改善策等

区分	回答
継続した活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアを休んでしまうと、情報が入らなくなってしまうので、サイトなどで見られると嬉しいです。 ・システム化されていない。 ・同じ場所に継続して支援をすることが重要だと感じています。
より良い支援	<ul style="list-style-type: none"> ・支援の場には、例えば学習支援なら勉強だけではなく居場所づくり、社会参加の機会、コミュニケーションの場づくりにも力を入れるべき。 ・支援の計画を子どもごとに綿密に立てても良いのではないかと思います。 ・一人ひとりがより対象の子どもをよく見て、合うか合わないか見るのが大切だと思った。 ・教育と心理の方針の違い。 ・みんなで一つの遊びをする方が楽しいと思う。
社会の意識を変える	<ul style="list-style-type: none"> ・親の意識 教育は学問だけでない。携帯ゲームをさせて教育の手抜きをすることはよくない。 ・子どもたちや若者の中には、夜に逃げ場所があることを求めている人もいますが、補導時間の関係で帰らなければいけないということ。
政策提言	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブな学習が少ない。高校や中学において。 ・子どもたちの選択肢を増やす教育をするべきだと思う。 ・日本の子どもたちは、学校のことを好きな場所だと思ってない子が多いような気がする。学校に通いたい、学校で勉強したいと思えるような学校づくりが必要である。 ・現在夏休みのため、そこで感じたのは、やはり熱中症だけにはなっていないため、行政のお金もそんなに使えないことはわかりますが、少しずつでも冷房付きの体育館がほしいと思っています。室内だと扉を閉めて部活をするため、より多くの休憩を取らないといけません。そうすると練習時間も減るため、せっかくの夏休み、一番成長できるこの時期を無駄にしてしまう可能性があります。厳しいのは百も承知ですが、少しでも検討していただき、より良い環境を子どもたちに与えたいと思っています。

④ 神奈川県への要望

区分	回答
社会参加 支援	<ul style="list-style-type: none"> ・十分発展していてできることは多いと思うので、やれることは積極的にやってみてほしい。そういう活動に是非協力したい。 ・支援したいと思っている人は、そういう機会を自分で見つけて行動できるが、そうでない多くの人への情報提供をもっとした方がよいと思う。
子ども・ 青少年	<ul style="list-style-type: none"> ・国籍や障がいで差別されず、どんな子どもでもいじめられない環境をつくってほしいです。問題を早期発見・早期解決できると、子どもの居場所を狭めないことにつながると思います。 ・子どもがいろんなものに縛られず遊べる場所をつくってほしい。 ・子どもは親の影響を受けやすいため、より良い子どもたちを育てるためには、親にも子どもにとって良い環境をつくるように話し合いの場を設けたりするべきだと感じる。 ・海の活用、自然を残してほしい。子どもが自然とふれあう機会を減らさないでほしい。 ・震災を忘れない学生が多くいてくれることを願っています。
教育問題	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの抱える問題に向き合う余裕がない学校にしないでほしい。 ・教員が多忙すぎる。 ・県立高校の校舎や体育館、部室棟などを少しずつ建て替えてほしいです。私の母校では壁にアスベストのあるところもありました。壁の板もボロボロ、床もミシミシと音の鳴るところも数多くありました。子どもの安全が大事！などと言っているのならそのようなところも気にしてほしいなと思っています。 ・学校のクラスの人数をもっと減らして先生がみる人数を減らせば、イジメや生徒の変化により気づきやすくなると思うので、是非やってほしい。
社会的弱者 支援	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的弱者への支援に力を入れてください。 ・金 ・障害児・者への支援の充実
地域の魅力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分は学校が神奈川にあるが、神奈川在住ではないので何とも言えないが、横浜以外を発展させるべきでは？ ・都会も近いし、自然が身近にある神奈川県が私は好きなので、学校、家、職場の行き来だけでなく、もっと近くに住んでいる人にこそ、地域に興味を持ってもらいたいです。 ・神奈川県には観光地がたくさんあるので、また訪れたいです
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・スピード違反を取り締まってほしい。 ・バスの本数を増やしてほしい。（特に愛川町方面）

⑤ 今の社会についてどのように感じますか？

区分	回答
良い	<ul style="list-style-type: none"> ・就活をしていて、女性も働きやすい社会というものが重要視されていることを実感した。 ・生涯ずっと同じ会社に勤めるという仕事パターンが絶対ではなくなり、私は色々なことをしたいので、よいと思う。

区分	回答
心配・不安	<ul style="list-style-type: none"> ・一部に無理をさせて回っている。 ・戦争に向かっている。 ・集団的自衛権に関する論争や、新幹線での自殺などの事件など、少し不安定な感じがする。 ・先が不安。このまま上の世代に任せて日本はどうなるのかと思う。あまりいいイメージがないです。でも自分は自分なりにやることやっていきたいと思っています。 ・「その人らしさ」を奪い、人を何かに縛り付けようとしているように感じる。 ・インターネットの普及についていけない。現実での人間関係の形成の難化。少子高齢化が原因の問題が深刻化。貧富の差が激しい。 ・まだまだ「働く」イメージが湧かないので、毎日一生懸命働いている人たちを見ると尊敬すると同時に、自分にも務まるのか…と不安にもなります。自分が社会人になって、社会に馴染めるのかどうか漠然とした不安があります。 ・良くも悪くも不安定。 ・就職はできても結婚はできない。将来はすぐに死んでしまいそうでなにも浮かばない。そういう社会。 ・経済的にもあまり余裕がないように感じる。 ・生きづらさがあると思う。 ・社会が人を殺している。悲しませている。
希薄化	<ul style="list-style-type: none"> ・SNSなどで多くの人と表面的につながりすることは可能だが、心からのつながりが薄くなっていると思う。 ・隣人の同士の関係が希薄になりつつあるように、人と人とが関わりあう場が少なくなっているように感じる。 ・人にあまり関心がないのではないのかなと感じる。みんな自己中心的になっていると思う。
こうしてほしい	<ul style="list-style-type: none"> ・経済的な問題で様々なことに苦労したり、断念せざるを得ない社会であると思ひ、負の連鎖を立つ事ができる社会になってほしいです。 ・もっと人を大切にすることを意識した社会づくりを行ってほしい。 ・非効率的。教育はジェネレーションギャップがある。 ・「普通」であることを強要し、「個性」が埋没しがち。 ・他人の顔色を伺うばかりだった時代から、個人の意思を尊重する風潮になっていると感じる。しかし、大きな範囲で見れば、変化に順応出来ない人間による足の引っ張り合いが行われ、結果収入などで目に見える格差も広がってしまっている。 ・差が生じていると感じる。例えば、貧富・男女・学力の差などである。特に、職場における女性の待遇については未だ課題があり、解決してほしい差である。 ・同性愛者や発達障害者などの今の社会では生きづらい人々への認識が低すぎると感じる。 ・「今」の社会かはわからないが、国として高齢者以外の福祉の充実が行われると良いと思う。

区分	回答
(こうしてほしい)	<ul style="list-style-type: none"> ・自由がなく、就職している人間ができる人、してない人間ができない人となってしまっている。 ・寛容さが欠けてきているように思う。またネットやSNSなどに頼りすぎているように思う。自分の考えを持ってるようで持っていない人が多い。精神的に大人な大人が少ない。 ・医療機関が不正をしたり、警察官が事件を起こすというニュースをメディアを通してよく目にします。本来なら一番信用される立場である人間が、そのような信頼を失くすことをしている世の中なので、もっと責任や自覚を持って日々行動することが必要なのではないかと感じます。 ・やりたいことがやりづらいと感じる反面で、考えているより大変ではないし何とかなるもんだと思っている。社会的地位や安定が大事なように見えて、好きなことに走っていく道を選択しづらい。
自分のことで精一杯	<ul style="list-style-type: none"> ・正直、どうでもいいです。社会がどのような方向に向かっても自分が幸せなら問題はないと思います。あと、自分のことで精一杯なので、そのようなことは気にかけてられません。 ・いいのか悪いのかよくわからない。
おかしい	<ul style="list-style-type: none"> ・極めて最近の話だと、ひどい独裁政治だと思う。民主主義とは形ばかりで中身には民意が反映されていない。国のお金の使い方がおかしい。無駄に巻き上げて必要のないところに使っている。増税したあとの使用先がおかしい。 ・日本は国民への説明責任を果たしてない。 ・形式張っている。もっと自由に自分自身を感じる遊びを大事にするべきだと思う。楽しくていきいきする人が増えれば社会もそうなる。真面目をはき違えている。今の社会はつまらないことが多すぎる。 ・日本のことしかわからないが、豊かな社会だと思う。少なくとも以前よりは自由な社会になっているのではないか。日本では、実際のところ、働かなくても生きていける。それ程には豊かだ。娯楽が増えたとし、電子機器の発達により場所や時間を問わず人とコミュニケーションを取ることが出来るようになった。個人の可能な範囲が広がった、これは自由の獲得だと思う。しかしその自由に振り回され、不自由になっているひとが多いように感じる。個人の境界が曖昧になり、社会全体が曖昧模糊としているように感じる。大抵の知識を得ることができる。様々な技術を用いる事ができる。個人の特長が薄れ、自己の認識が難しくなっている。個性がない平均的な社会になりつつあるのでは、と感じる。 ・人の目を気にしすぎる。 ・子どもに教える立場の大人が常識がしっかりしていない。 ・〇〇〇〇の憲法改正はおかしい。 ・大人が全てを押し付ける。 ・メディア…ってどうなんでしょうかね。

区分	回答
(おかしい)	・日本の政治家、政治自体が他の国と比べずさんな状況であると思います。先程のバブル時代の人にいい印象がないとつながりますが、自分のことばかりを考えて私たち若者のための政策を考えずくだらないことを議会で毎日討論しているのは見ていて寒気がします。有権者からすれば若者よりも高齢者のための政策を打ち立てるのは私たちにも責任はありますが、日本の未来のため、隣国との社会的立場の確立など日本は今どうすべきなのか、メディアも含めやり方や考え方を見直してほしいなと思います。

(3) 仕事について

① 仕事を選ぶ上で大切なことは何だと思いますか？

(複数回答)	%
やりがい	78.6
収入	60.7
安定	58.9
プライベートも大切にできる	53.6
良い仲間がいる	50.0
好きなこと	46.4
社会的意義があること	41.1
喜んでもらえること	37.5
学べる・技術が身につくこと	30.4
挑戦	21.4
その他	1.8
無回答	1.8

② 就職活動のために何かやっていることがありますか？

(複数回答)	%
アルバイト	62.5
就職試験や資格取得のための勉強	51.8
ボランティア	48.2
インターン	28.6
OB訪問	7.1
家事（主婦・主夫）	7.1
起業する	1.8
その他	3.6
無回答	10.7

③ 将来、どのような働き方をしたいと思いますか？

(単一回答)	%
正社員	83.9
自営業	8.9
派遣社員	1.8
契約社員	0.0
パートタイム・非常勤	0.0
その他	3.6
無回答	1.8

2 グループインタビュー結果の概要

当初は高校生をつれて福島にバスツアーをしようと計画したが、その子たちを連れて行く危険性について大人に指摘され「彼らが大人になったときに責任が取れるのか」と聞かれて、ずしっと責任を感じた。リスクを考えることをしていなかったと思い、それならできることはないかと思って勉強会にした。

(被災地支援の若者たち)

- 東日本大震災を体験し、現場のことを体験として若者が知ることが大切ではないかと思って活動を始めた。今は大学生と岩手にいくツアーを組んだり、福島について考える勉強会を神奈川で開いている。
- どうしたらいいか、まだ自分たちには変えられる余地があるんじゃないかと思う。大学だと、「どうして間違っているのか」を聞けるので、話しやすい。
- アドバイスをくれる人を大人だと思う。なんでそんなことを言うのかって思うけど、見返してやろうとも思う。
- 対等な関係のほうが本音を話しやすいと思う。
- お金を扱っていて思うのは、何かあったら責任が親に行くということ。支えられるのは嬉しいけどそうすると自立できない気がする。自分で一から頑張ることを挑戦してみて、そういうことが、今、少ないのかなと思う。困ったことがあった時に大人に相談するというのは自分のなかでもない。
- 福島の子どもたちとすごして、ずっと一緒に生活してやっと本音を話してくれると思った。
- 子どもたちにとって、自分の気持ちを言えるようになるっていうのはとても大事な気がする。そういう声を汲んであげたいと思う。自分が何をやりたいのかわからないところもある。周囲の友人をみていると、就職に有利だとか、そういう理由でとりあえず動いている人が多い。

自分たちの思いだけで授業をつくっていても、先生には「全然ダメ」と言われたりする。傷ついた体験がある人もいるからって注意を受けることもある。プロである先生には勝てない。そちら側には自分は無理だと思った。授業の全体についてはプロである先生に任せようと思った。

一方で大人のイメージとしては、組織や立場を第一に考えて動かないといけない、自分の考えだけでは動けない感じがする。

(SNSについての研修活動の若者たち)

- きっかけは、同級生が色々と活動していて自分も何かできないかと思った。SNSのことを知って、自分は親が厳しくしてくれていたから大丈夫だったのかもしれないと思った。そういう大人が周囲にいない人がいるのかもしれない。だから自分ができることがあるんじゃないかと思った。大人と子どもの架け橋になりたい。
- 最近の親って優しい人が多い、叱らない人が多いように思う。ゆるいなあって。
- 「送信ボタンを押す前にちょっと考える」っていうところを提案したりはする。学校で何かあった時はここって情報を伝えはするけど、あまり響いている感じがしない。本当に伝えたい人はあまり関心を持っていなくて、研修に来たりしない保護者の人も含めて、どうやって支援を届けたらいいかを考えている。
- 自分と高校生でも世代差ができてきて、自分もフォローできていない部分もある。それを埋めつつ、大人とのギャップも埋めていきたい。

きっかけは高校時代の先生が活動していたのを手伝ったこと。生活ができなくて退学してしまう人たちを見て、何とかしなければと思って活動を始めた。お互いボランティアだと年齢とか立場をこえて話しやすいところはあるかもしれない。対等になれる。

(学習支援・不登校ひきこもり体験者の社会参加支援の若者たち)

友だちとの間では、その関係を壊さないっていうのが第一にある。家族だと違う経験をしているところから情報や意見をもらえたりする。

人と一緒に関わりたいというのは根底にある欲求なのかなと思う。辛い人も、誰かその気持ちを共有できる人がいると楽になるのかもしれない。

(小さな子どもたちと関わる活動の若者たち)

資料編

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会 審議経過

開催日	会 議	主な審議内容
平成26年 9月16日（火）	第1回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・会長、副会長の選出について ・平成26・27年期審議テーマについて ・企画調整部会委員の選出について
同日	第1回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・部会長、副部会長の選出について ・協議スケジュールについて ・委員意見発表、意見交換
10月20日（月）	第2回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員意見発表、意見交換
11月17日（月）	第3回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員意見発表、意見交換
12月17日（水）	第4回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・委員意見発表、意見交換
平成27年 2月9日（月）	第5回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・中間報告（案）について ・平成27年度の展開について
3月26日（木）	第2回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・企画調整部会中間報告について
同日	第6回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・平成27年度の展開について
5月14日（木）	第7回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・実践検証事業（案）について ・かながわ青少年育成・支援指針の改定について
8月19日（水）	第3回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・改選委員の委嘱 ・かながわ青少年育成・支援指針の改定の方向性について ・企画調整部会における審議の進捗状況について
同日	第8回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・「今を生きる子ども・若者は社会をどう捉えているか」をテーマとした実践検証事業（webアンケート・グループインタビュー）の実施状況について ・最終報告の骨子について
11月2日（月）	第9回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告書（素案）の検討 ・かながわ青少年育成・支援指針（素案）について
平成28年 2月1日（月）	第10回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告（案）の検討
同日	第4回協議会	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告（案）について ・かながわ青少年育成・支援指針（案）について

平成26・27年期神奈川県青少年問題協議会委員

会 長	笹井 宏益	(国立教育政策研究所生涯学習政策研究部長) *
副会長兼 部会長	小杉 礼子	(独立行政法人労働政策研究・研修機構特任フェロー) *
副部会長	萩原 建次郎	(駒澤大学総合教育研究部教授) *
委 員	いそもと 桂太郎	(神奈川県議会議員 ~平成27年7月19日)
	植田 威	(学校法人岩崎学園理事/特定非営利活動法人 NPO情報セキュリティフォーラム事務局長) *
	小川 久仁子	(神奈川県議会議員 平成27年7月20日~)
	岸部 都	(神奈川県議会議員 ~平成27年7月19日)
	坂倉 杏介	(東京都市大学都市生活学部准教授) *
	嶋村 仁志	(TOKYO PLAY 代表/日本冒険遊び場づくり協会理事) *
	田中 多恵	(特定非営利活動法人エティック横浜ランチ マネージャー) *
	西野 史子	(一橋大学大学院社会学研究科准教授) *
	はかりや 珠江	(神奈川県議会議員 平成27年7月20日~)
	藁田 薫	(特定非営利活動法人育て上げネット若年支援事業部 担当部長) *
	松田 良昭	(神奈川県児童福祉審議会委員長)

- 任期は平成26年7月20日~平成28年7月19日
- *印は企画調整部会委員



神奈川県

青少年課

横浜市中区日本大通1 〒231-8588 電話(045)210-1111(代表)